<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性 (三)</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>新井 皓士</td>
</tr>
<tr>
<td>発行誌名</td>
<td>一橋論叢</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2000-03-01</td>
</tr>
<tr>
<td>部門</td>
<td>部門不詳</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/10533">http://doi.org/10.15057/10533</a></td>
</tr>
<tr>
<td>右欄</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性（三）

新 井 皓 士

ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性（三）

テーマ・シラー往復書簡集の文体論的特性（三）

一 主題の継続

前稿において我々は一七九四年から一七九七年のテクスト・データに基づき、以下の諸点を確認した。

（i） 文章長はほぼ対数正規分布に従う。

（ii） 文章長に基づき、以下が示唆される。即ち、その効果は分析の方法によってかなり異になる。たとえば、データとシラーの文章長頻度分布について同様な事実を示す。一方、両者の文章長頻度平均についての検定や分散分析は有意となる。すなわち、対象が存在する確率をもつ分布を示す。顕著度分布によるカイニ変異性検定の検出力は効力を失い、むしろ平均値に関心をもった。不変化四語の変化を観察した場合、ゲーテ・シラーそれぞれに特徴的な四語（über auch manэн）を選び、一七九四年から九六三年のデータに基づく線形判別式を作成し判別分析を行った。その結果、内部データ（四四模値群）については四模値中二個の誤判別が生じた。

（iv） 不変化四語を用いて主成分分析を試みたところ、九四年（九七年のゲーテ・シラーそれぞれ四語）
（３） ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性（三）

表1 文章長データ

<table>
<thead>
<tr>
<th>ゲーテ</th>
<th>文数</th>
<th>平均(対数標準偏差)</th>
<th>シラー</th>
<th>文数</th>
<th>平均(対数標準偏差)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>G1794</td>
<td>157</td>
<td>2.919 0.672</td>
<td>S1794</td>
<td>305</td>
<td>3.068 0.539</td>
</tr>
<tr>
<td>G95-1</td>
<td>150</td>
<td>2.586 0.631</td>
<td>S95-1</td>
<td>150</td>
<td>2.885 0.634</td>
</tr>
<tr>
<td>G95-2</td>
<td>149</td>
<td>2.699 0.683</td>
<td>S95-2</td>
<td>151</td>
<td>2.753 0.582</td>
</tr>
<tr>
<td>G95-3</td>
<td>150</td>
<td>2.745 0.631</td>
<td>S95-3</td>
<td>149</td>
<td>2.745 0.607</td>
</tr>
<tr>
<td>G95-4</td>
<td>113</td>
<td>2.799 0.684</td>
<td>S95-4</td>
<td>151</td>
<td>2.636 0.827</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-1</td>
<td>98</td>
<td>2.910 0.685</td>
<td>S95-5</td>
<td>149</td>
<td>2.685 0.619</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-2</td>
<td>87</td>
<td>2.913 0.652</td>
<td>S95-6</td>
<td>69</td>
<td>2.633 0.597</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-3</td>
<td>56</td>
<td>3.146 0.744</td>
<td>S96-1</td>
<td>123</td>
<td>2.600 0.664</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-4</td>
<td>134</td>
<td>2.824 0.759</td>
<td>S96-2</td>
<td>138</td>
<td>2.650 0.633</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-5</td>
<td>102</td>
<td>2.838 0.656</td>
<td>S96-3</td>
<td>312</td>
<td>3.100 0.677</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-6</td>
<td>84</td>
<td>3.302 0.575</td>
<td>S96-4</td>
<td>91</td>
<td>2.871 0.613</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-1</td>
<td>101</td>
<td>3.128 0.606</td>
<td>S96-5</td>
<td>142</td>
<td>2.700 0.656</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-2</td>
<td>131</td>
<td>3.042 0.624</td>
<td>S96-6</td>
<td>136</td>
<td>2.969 0.655</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-3</td>
<td>114</td>
<td>3.043 0.651</td>
<td>S97-1</td>
<td>121</td>
<td>2.632 0.665</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-4</td>
<td>147</td>
<td>3.265 0.651</td>
<td>S97-2</td>
<td>172</td>
<td>2.928 0.669</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-5</td>
<td>173</td>
<td>3.083 0.565</td>
<td>S97-3</td>
<td>219</td>
<td>3.038 0.658</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-6</td>
<td>142</td>
<td>2.998 0.734</td>
<td>S97-4</td>
<td>121</td>
<td>3.014 0.662</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-7</td>
<td>120</td>
<td>3.030 0.610</td>
<td>S97-5</td>
<td>129</td>
<td>2.966 0.622</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-1</td>
<td>180</td>
<td>3.026 0.649</td>
<td>S97-6</td>
<td>208</td>
<td>2.916 0.701</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-2</td>
<td>163</td>
<td>3.155 0.626</td>
<td>S98-1</td>
<td>166</td>
<td>3.043 0.652</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-3</td>
<td>124</td>
<td>3.009 0.603</td>
<td>S98-2</td>
<td>144</td>
<td>3.018 0.764</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-4</td>
<td>130</td>
<td>3.001 0.636</td>
<td>S98-3</td>
<td>110</td>
<td>2.920 0.698</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-5</td>
<td>137</td>
<td>2.832 0.621</td>
<td>S98-4</td>
<td>112</td>
<td>2.869 0.711</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-6</td>
<td>74</td>
<td>2.820 0.533</td>
<td>S98-5</td>
<td>90</td>
<td>2.903 0.653</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-7</td>
<td>207</td>
<td>2.917 0.551</td>
<td>S98-6</td>
<td>123</td>
<td>2.836 0.742</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>S98-7</td>
<td>306</td>
<td>2.802 0.735</td>
</tr>
<tr>
<td>total</td>
<td>3233</td>
<td>2.953 0.659</td>
<td>total</td>
<td>4087</td>
<td>2.885 0.673</td>
</tr>
</tbody>
</table>

図1

文章長平均の時系列変化

表2 文章長の分散分析

<table>
<thead>
<tr>
<th>1794-1798 ゲーテ書簡文(26帳本群)</th>
<th>1794-1798 シラー書簡文(26帳本群)</th>
<th>1794-1798 ゲーテ・シラー書簡文合併(51帳本群)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>変動要因 平方和 自由度 不偏分散 分散比</td>
<td>変動要因 平方和 自由度 不偏分散 分散比</td>
<td>変動要因 平方和 自由度 不偏分散 分散比</td>
</tr>
<tr>
<td>群間 85 899 24 3 579 8 246</td>
<td>群間 51 472 25 3 859 8 077</td>
<td>群間 185 719 50 3 714 8 780</td>
</tr>
<tr>
<td>群内 1317 185 3207 0.434</td>
<td>群内 1738 215 4060 0.453</td>
<td>群内 3075 400 7269 0.423</td>
</tr>
<tr>
<td>全体 1403 074 3232</td>
<td>全体 1849 587 4086</td>
<td>全体 3261 119 7319</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* 1794-1798 ゲーテ・シラー書簡文合併(51帳本群)
図2-1 統合標本のヒストグラムと記述統計量（ゲーテ1794-1798）

G9498BUN

図2-2 統合標本のヒストグラムと記述統計量（シラー1794-1798）

S9498BUN
（5）ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性（三）

分散分析の為に必要であった。表一の下にある折れ線グラフは、平均値を時系列的に図示したものであり、両者のデータは時期に応じて同一値でしばしば同一なるものである。しかし、両者のデータは時期的に必ずしも同一とは限らないので、両者は時系列に近い位置で推移している。長年後半、あるいは二つの線がほとんど重なっており、またゲーテの方が概ね高い位置で推移していることは、はずれ均衡、すなわち極度に長い文が存在することを示している。箱ひげ図ではばらつきが一層鮮明に示されるが、ここでは省略した。

ニュース記事などの文章長にはあまり変動がなく、平均で判断した分散分析にそだつられるようだ。表にその一部を示した分散分析にそだつられるようだ。表一にその一部を示した分散分析にそだつられるようだ。図一・二は同じく合併したゲーテの統合標本によるヒストグラムと記述統計量であり、図二・二はジュールのそれである。中央値は共に九五％信頼期間かわかり、ずれならば、すなわち極度に長い文が存在することがを示している。箱ひげ図ではばらつきが一層鮮明に示されるが、ここでは省略した。

ニュース記事などの文章長にはあまり変動がなく、平均で判断した分散分析にそだつられるようだ。表にその一部を示した分散分析にそだつられるようだ。図一・二は同じく合併したゲーテの統合標本によるヒストグラムと記述統計量であり、図二・二はジュールのそれである。中央値は共に九五％信頼期間かわかり、ずれならば、すなわち極度に長い文が存在することがを示している。箱ひげ図ではばらつきが一層鮮明に示されるが、ここでは省略した。

ニュース記事などの文章長にはあまり変動がなく、平均で判断した分散分析にそだつられるようだ。表にその一部を示した分散分析にそだつられるようだ。図一・二は同じく合併したゲーテの統合標本によるヒストグラムと記述統計量であり、図二・二はジュールのそれである。中央値は共に九五％信頼期間かわかり、ずれならば、すなわち極度に長い文が存在することがを示している。箱ひげ図ではばらつきが一層鮮明に示されるが、ここでは省略した。

ニュース記事などの文章長にはあまり変動がなく、平均で判断した分散分析にそだつられるようだ。表にその一部を示した分散分析にそだつられるようだ。図一・二は同じく合併したゲーテの統合標本によるヒストグラムと記述統計量であり、図二・二はジュールのそれである。中央値は共に九五％信頼期間かわかり、ずれならば、すなわち極度に長い文が存在することがを示している。箱ひげ図ではばらつきが一層鮮明に示されるが、ここでは省略した。

ニュース記事などの文章長にはあまり変動がなく、平均で判断した分散分析にそだつられるようだ。表にその一部を示した分散分析にそだつられるようだ。図一・二は同じく合併したゲーテの統合標本によるヒストグラムと記述統計量であり、図二・二はジュールのそれである。中央値は共に九五％信頼期間かわかり、ずれならば、すなわち極度に長い文が存在することがを示している。箱ひげ図ではばらつきが一層鮮明に示されるが、ここでは省略した。
図3-1

図3-2

図3-3
（7）ゲーテ・シュラー往復書簡集の文体論的特性（三）
(9) ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性（三）

主成分分析
布図图（標本）

図5 Goethe/Schiller 年次ファイル（1794-1798）

図6 Goethe/Schiller 分割ファイル（25+26）

表4 各標本の主成分得点

<table>
<thead>
<tr>
<th>標本</th>
<th>第一主成分</th>
<th>第二主成分</th>
<th>標本</th>
<th>第一主成分</th>
<th>第二主成分</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>G1794</td>
<td>-0.718</td>
<td>0.499</td>
<td>S1794</td>
<td>2.607</td>
<td>0.171</td>
</tr>
<tr>
<td>G95-1</td>
<td>-1.997</td>
<td>0.199</td>
<td>S95-1</td>
<td>2.650</td>
<td>1.026</td>
</tr>
<tr>
<td>G95-2</td>
<td>0.062</td>
<td>-0.596</td>
<td>S95-2</td>
<td>2.471</td>
<td>0.877</td>
</tr>
<tr>
<td>G95-3</td>
<td>-3.860</td>
<td>-0.415</td>
<td>S95-3</td>
<td>1.633</td>
<td>-0.537</td>
</tr>
<tr>
<td>G95-4</td>
<td>-1.634</td>
<td>-0.291</td>
<td>S95-4</td>
<td>1.853</td>
<td>-2.695</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-1</td>
<td>-0.413</td>
<td>-0.355</td>
<td>S95-5</td>
<td>2.710</td>
<td>-1.291</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-2</td>
<td>-3.242</td>
<td>-2.126</td>
<td>S95-6</td>
<td>2.249</td>
<td>-1.001</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-3</td>
<td>-2.094</td>
<td>0.928</td>
<td>S96-1</td>
<td>1.401</td>
<td>-3.870</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-4</td>
<td>-1.969</td>
<td>0.422</td>
<td>S96-2</td>
<td>1.585</td>
<td>-0.616</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-5</td>
<td>-3.901</td>
<td>-1.586</td>
<td>S96-3</td>
<td>2.179</td>
<td>1.546</td>
</tr>
<tr>
<td>G96-6</td>
<td>-0.602</td>
<td>1.719</td>
<td>S96-4</td>
<td>0.863</td>
<td>-1.371</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-1</td>
<td>-1.248</td>
<td>-0.618</td>
<td>S96-5</td>
<td>0.923</td>
<td>-3.085</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-2</td>
<td>-0.903</td>
<td>1.691</td>
<td>S96-6</td>
<td>3.058</td>
<td>-0.147</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-3</td>
<td>-1.384</td>
<td>-2.145</td>
<td>S97-1</td>
<td>0.392</td>
<td>-1.172</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-4</td>
<td>-1.490</td>
<td>0.730</td>
<td>S97-2</td>
<td>1.218</td>
<td>0.426</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-5</td>
<td>-1.549</td>
<td>1.734</td>
<td>S97-3</td>
<td>1.238</td>
<td>0.521</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-6</td>
<td>-1.476</td>
<td>1.519</td>
<td>S97-4</td>
<td>3.320</td>
<td>1.539</td>
</tr>
<tr>
<td>G97-7</td>
<td>-1.099</td>
<td>1.693</td>
<td>S97-5</td>
<td>0.204</td>
<td>-0.594</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-1</td>
<td>-0.507</td>
<td>1.476</td>
<td>S97-6</td>
<td>1.290</td>
<td>1.109</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-2</td>
<td>-0.477</td>
<td>2.032</td>
<td>S98-1</td>
<td>0.654</td>
<td>2.775</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-3</td>
<td>-2.742</td>
<td>-1.339</td>
<td>S98-2</td>
<td>0.677</td>
<td>2.474</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-4</td>
<td>-1.983</td>
<td>2.400</td>
<td>S98-3</td>
<td>2.174</td>
<td>-1.281</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-5</td>
<td>-1.531</td>
<td>0.694</td>
<td>S98-4</td>
<td>2.010</td>
<td>-1.445</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-6</td>
<td>-1.359</td>
<td>-1.157</td>
<td>S98-5</td>
<td>0.225</td>
<td>0.407</td>
</tr>
<tr>
<td>G98-7</td>
<td>-2.125</td>
<td>-0.149</td>
<td>S99-6</td>
<td>0.439</td>
<td>-1.358</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>S98-7</td>
<td>0.581</td>
<td>0.120</td>
</tr>
</tbody>
</table>
三変動が激しいようにもみえるが、目的の幅が少し違う
ので、実際はゲーテの、横軸目盛り二番前後が高い
所で、一番濃い部分がシェーバー方ではほぼ安定推移して
いるのに対し、ゲーテ方では上下に波打つ傾向がある。こ
のような視覚的象徴が分散分析の結果と一致するよう
に思われる。四年から九月まで平均値のデータを
表三、一が一九〇年後半におけるデータで表文の長さ
（対数）をヒストグラムで表わしたものので、図四・
二は時系列に近い形で表わしたもので
があり、図三・三は同じデータの二十項移動平均をとっ
て両者をくらべると、どちらかといえばゲーテの方が正規
分布に近い形を示されておりという。図三・二
表三、一が元のデータ、図四・三が二十項移動平均である。

四・二が元のデータ、図三・三が

図三、一が一九〇年後半におけるデータで表文の長さ

（対数）をヒストグラムで表わしたものので、図四・

二は時系列に近い形で表わしたもので

あり、図三・三は同じデータの二十項移動平均をとっ

て両者をくらべると、どちらかといえばゲーテの方が正規

分布に近い形を示されておりという。図三・二

表三、一が元のデータ、図四・三が二十項移動平均である。

四・二が元のデータ、図三・三が

四、二が元のデータ、図三・三が二十項移動平均である。
（11）ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性（三）

図7 Goethe/Schiller 年次ファイル（1794-1798）

図8 Goethe/Schiller 分割ファイル（1794-1798）

表5 （図8のデータ）

<p>| | | | | | |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>aber</td>
<td>1.340</td>
<td>-0.052</td>
<td>nicht</td>
<td>0.533</td>
<td>-0.109</td>
</tr>
<tr>
<td>als</td>
<td>0.288</td>
<td>0.093</td>
<td>noch</td>
<td>0.249</td>
<td>-0.810</td>
</tr>
<tr>
<td>auch</td>
<td>0.260</td>
<td>-0.976</td>
<td>nun</td>
<td>-1.189</td>
<td>0.196</td>
</tr>
<tr>
<td>bald</td>
<td>-1.103</td>
<td>-0.170</td>
<td>nur</td>
<td>-0.650</td>
<td>0.433</td>
</tr>
<tr>
<td>da</td>
<td>-0.004</td>
<td>-0.226</td>
<td>recht</td>
<td>-0.871</td>
<td>-0.9</td>
</tr>
<tr>
<td>dass</td>
<td>0.606</td>
<td>0.021</td>
<td>schon</td>
<td>-0.310</td>
<td>0.073</td>
</tr>
<tr>
<td>denn</td>
<td>-0.987</td>
<td>0.028</td>
<td>so</td>
<td>0.189</td>
<td>0.083</td>
</tr>
<tr>
<td>doch</td>
<td>-1.118</td>
<td>-0.462</td>
<td>und</td>
<td>-0.846</td>
<td>0.533</td>
</tr>
<tr>
<td>hier</td>
<td>0.526</td>
<td>-1.041</td>
<td>wenn</td>
<td>-0.217</td>
<td>-0.399</td>
</tr>
<tr>
<td>nun</td>
<td>-1.225</td>
<td>0.312</td>
<td>wohl</td>
<td>-0.929</td>
<td>-0.876</td>
</tr>
</tbody>
</table>

ゲーテ、シラーそれぞれ五個の年次データ標本による布図（標本データを標準化した2スコアの共分散行列）を作成し、その固有値（Eigenvalues）と固有ベクトル（Eigenvectors）を算出する。次に、2スコア行列と固有ベクトルとの積を順次求め、これを各標本の主成分得点とする。その結果得られた布図が、図五（ゲーテ、シラー）に現れており、ガーテーターの分析をおこなう際、各項目の対応の対系と、五個の分析標本の布図では、両者の領域
主成分分析コンポーネント（図6）では、分割標本G九五・二とS九七・五が近接し、他にG九六・一やS九七・六とS九八・五、S九八・六、S九八・七のように、GS境界付近にあって、仮に外部的判断基準がないとすれば、グループを形成するとしてもおかしくないものがみられる。作者不明文献の探索などでは、これではなお心もとれない。種々のクラスター分析等を適用して比較することも考えられるが、ここではゲーテ書簡、シラーの文系
<table>
<thead>
<tr>
<th>19646</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>-028 (man) +0.063 (nichl) +0.876 (nun)</td>
</tr>
<tr>
<td>+051 (man) +0.669 (nichl) +0.679 (nichl)</td>
</tr>
<tr>
<td>Z = -0.987 (aberr) -0.725 (nichl) -0.679 (aberr)</td>
</tr>
<tr>
<td>123 (man) +0.669 (nichl) +0.876 (nun)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

允許供給数

-028 (man) +0.063 (nichl) +0.876 (nun)
-051 (man) +0.669 (nichl) +0.679 (nichl)
Z = -0.987 (aberr) -0.725 (nichl) -0.679 (aberr)
123 (man) +0.669 (nichl) +0.876 (nun)
（15） ゲーテ・シラー往復書簡集の文体論的特性（三）
その社会的地位や経済的差異は明らかである。しかし、当時の文芸・思想界の風潮に抗して、共産主義を結集し、シェークスピアの小説『ウィルヘルム・マイスター』の修行時代、シェイクスピアの戯曲『ヴァレンシュタイン』の完成にあたっては、互いに助言を求める学問なく意見を交わしていゆるディツ古典主義思想の結晶化に努める。その一方、二人の天賦の才、気質の違いについては、ほかならぬシェークスピア自身による分析が『とべレルン』掲載の論文『素朴文学と情欲文学』となって世に聞かれたという。

シェークスピアを愛の名手だ、などとその様々な恋愛体験を嘆嘆する俗説に筆者は合うわけではない。むしろヴァイマール宮廷社会の中枢にありながら、一七八年七月十一日の出会い以来、市民身分のすなわち貴族社会からは暗い教会と仏教の祝詞を受けたヴァイマールに進駐し、あわやの危機にクリスティアンが助けたちかかったというハノ年月のことである。（Parth, W. Goethes Christen, Münchener 1980）

移動平均の計算等はいつものようにAWKを用い、結果の図示はSPSSを制式にSPSSで行い。国はSPSSで描いたものをウィンドウズ版のSPSSにコピーして修正した。また表は、エクセルで印刷にコピーテープを使って手間と時間を最小限にとめた、ダブルタイプの空気の読者の方の求めるに応用すれば、時に面白いい観察が可能である。筆者も偶然カッパの『変身』に適用してみて、その応用可能性に感心した。
不変化詞 20

年次ファイル
1-5  Goethe
6-10 Schiller


14  このことをゲーテはシェーラ没後十二年を経て、『シェーラ』との最初の知遇において回想し、当初シェーラを避けていたこと、精神的対極にあるとみなしていたこと、イェーナの自然学協会の初出で偶然出逢い、植物の変態について論議するうち、思わぬ共感をえたことなどを語っている。この回想は、のちに少し筆を加えて『幸運な出来事』と改題された。

（15）初演は一八四年三月、ヴァイマール宮廷劇場。